

インパール作戦と インドの独立

教育問題プロジェクトチーム

和田 昭 陸士60

はじめに

先人の足跡―20（「偕行」4月号）で

宮崎繁三郎陸軍中将が採り上げられ、第33師団宮崎歩兵団の将兵がインパール作戦を戦い、その後、ビルマでは第54師団を率いてしんがりの軍として苦難の退却をした経緯を学びました。ここではインパール作戦について別の視点からその意義を見てみたいと思います。

インパール作戦は戦後大東亜戦争における三大愚戦の一つとして知られるようになり、その悲惨さにおいて最たるものと言われています。日本軍の退路は白骨街道とさえ言われました。

作戦途中で弾薬食料等の補給が殆ど尽き、折から豪雨続きの雨期に入ってマラリア、デング熱の流行に悩まされました。開戦当初と違い英印軍はアメリカから送られた豊富な新鋭兵器を補給されていました。

日本軍にはチャンドラ・ボース指揮のインド国民軍が加わっていました。我が将兵の筆舌に尽くせない善戦健闘にもかかわらず、作戦に参加した日印10万名のうち、死者は3万名を数え、インド国民軍も幾千の犠牲者を出し、

一方的な敗戦となりました。

現地で作戦を強行した第15軍司令官牟田口廉也中将に対しては、戦後強い批判が起こり、多くの著書にも採り上げられております。しかしこの作戦を改めて広い視点から、その意義を掘り下げて考えてみたいと思います。

戦後50周年に当たった時期（1995年）にインパール周辺戦場だった現地で、住民達があの戦いを現在どのように受け止めているかが取材され、映像として記録が残されました。（「自由アジアの栄光」―終戦五十年国民委員会―）

まずその資料を参考に紹介してから、インパール作戦が戦後インド独立に向かってどのように影響を及ぼしたかを辿ってゆきたいと思えます。

1 『自由アジアの栄光』より紹介

インパールの南15kmに高地があります。現地の人々はこれを「日本人が赤い血を流した丘」として讀え「レッド・ヒル」と呼んできました。丘のふもとには村人が建てた日本兵の慰霊塔があります。ここでは毎年、日本兵を供養する慰霊祭が続けられてきました。この慰霊塔建立の中心となったのが、地元ロトパチン村のモヘンドロ・シンハ村長です。村長はその思いを次のように語ってくれました。

「私たちは、日本兵が私たちの自由解放のため戦ってくれているのを知っ

ていましたので、食料や衣料を喜んで提供しました。

ところがそれを知ったイギリス軍が厳しく取り締まったため、日本兵はますます困難に陥りました。しかし、日本兵は飢餓の中でも勇敢に戦いました。そしてこの村のあちこちで壮烈な戦死を遂げて行きました。

この勇ましい行動の総ては、みなインド独立のための戦いだったのです。

私達はいつまでもこの壮烈な記憶を、若い世代に伝えて行こうと思っております。その為、ここに日本兵へのお礼と供養のため、慰霊記念碑を建てて独立インドのシンボルにしたのです」

「日本の兵隊さんは、命をはって私達を戦場から逃れさせ、私たちの自由のため戦ってくれました。いま、こうして私達が生きていられるのも、みな日本の兵隊さんのおかげだと思つと感謝の気持ちでいっぱいになります。一生この気持ちは忘れる事ができません」

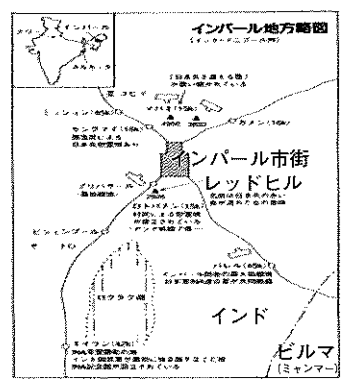
2 インド国民軍との共同作戦

1944（昭和19）年発動したインパール作戦にはインド国民軍は第1師団約6千名が参加し、日本軍と行動を共にしました。国民軍の兵士達は口々に「チエロ・デリー」「ジャール・ヒンド」（インド独立万歳）を叫んで進軍しました。コヒマを占領し、続いてインパール南方45kmのモイランを占領して、国民軍は初めてインド独立旗を掲げました。兵士達は土を両手で握りしめ、「おお、我が祖国！」と涙を流さんばかりでした。一方日本軍の糧食・弾薬の補給は途絶したままでした。その上6月に入ると、印緬国境は本格的な雨期に入り、川という川は氾濫し、泥水は道路を崩し、いつさいの補給は止まってしまいました。将兵の大半はアメーバ赤痢、マラリアなどを患いました。国民軍の将兵は現地住民ナガ族の部落付近にある陸稲を集め、ジャングルの草に混ぜ僅かに飢えをしのいでいました。7月12日、遂に作戦は中止、インパールの土と消えた日本将兵はおよそ



モヘンドロ・シンハ氏 ロトパチン村村長。日本兵の勇敢な戦闘ぶりを讀え、また飢えの中で戦死した兵士を弔うため村人に呼びかけて慰霊塔を建立した。村長は死ぬまでこの塔を守り続けると語る。（出典：『自由と独立への道』）

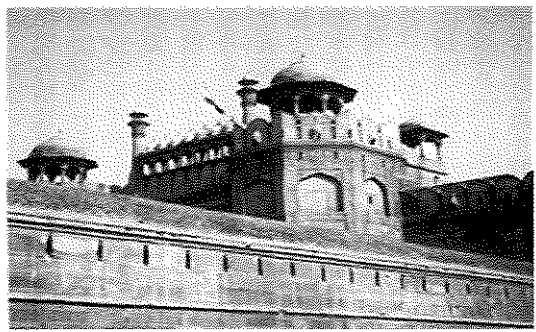
3万、インド国民軍兵士の犠牲は、およそ3千に達し、大東亜戦争中、最も悲劇的な戦いと評されています。



出典：『自由と独立への道』

日本の敗戦後も国民軍司令官チャンドラ・ボースの闘志はいささかも衰えませんでした。ボースはソ連と結んで今度は北からインドへ進攻する計画を抱いていたのです。ところがソ連に向かう途中の台北で飛行機事故に遭い、帰らぬ人となりました。遺言は、「天皇陛下と寺内さん(南方軍総司令官)に宜しく」だったとの事。遺骨は日本に送られ、今も東京の蓮光寺に眠っています。インド国民軍の将兵1万9500名は英軍の捕虜として送還され、待つていたのは反逆罪による軍事裁判でした。

将兵全てを裁判の対象にする事は困難です。そこでヒンズー教、イスラム教、シーク教から高官1名ずつを選んで被告とし、ニューデリーのレッド・フォートと言う城を法廷に選びました。裁判が1945年11月5日に開始さ



軍事裁判の行われたラール・キラ この英国名で赤い城レッド・フォートは、ムガル王朝最後の王城であり、英国支配時代の英印軍の牙城であった。(出典：『自由と独立への道』)

れると、インド各地で「裁判の即時停止、被告の即時釈放、統治権の返還、英人の引き上げ等」を要求する猛運動がインド各地で巻き起こり、民衆の憤激は日一日と高まり、遂に暴発したのはボースの出身地カルカッタでした。続いてボンベイでは5万人の民衆がデモを行い、各地の都市に広がりました。法廷では、国民会議派の長老フラバイ・デサイ博士を代表とする大弁護団が組織され、4点について理路整然と主張しています。(その内容については、本誌平成29年10月号の「先人の足跡」を御覧下さい。)

裁判の進行と共に、各地で流血のゼネストに発展し、カルカッタだけでも数百人の死傷者に達しました。

第1回軍事裁判が12月30日に終了し、「無期流刑」の判決が下りましたが、翌年1月3日総司令官は、判決を正当と認めたものの、刑の執行を停止し捕虜を釈放しました。これは事実上インド民衆の主張を認めたものでした。

2月21日になると、英当局が再び肝をつぶすような大事件が起きました。

海軍のインド人乗組員が、ボンベイ、カラチ、カルカッタで一斉に反乱を起したのです。何れも占拠艦船の艦砲に砲弾を装填して、若し英帝国が武力弾圧に出れば、直ちに全艦砲をもって応えると宣言しました。最も忠誠を信じていただけに英本国には大きなショックでした。こうしてインドは、英国からの2百年に及ぶ植民地支配に終わりを告げ、昭和22年8月15日、遂に独立宣言をしました。

3 むすび

最後に、「偕行」平成29年10月号(拙稿)を引用しますが、インドの独立は周辺国に大きな影響を及ぼし、中近東、アフリカ、中南米の各種植民地に燎原の火のように拡大し、戦前40数カ国だった世界の独立国が現在では190カ国以上となつています。

英国のインドからの撤退については、戦後、英国政府の当時の最高責任者であったアトリー首相が、昭和31年、インドのベンガル州を訪問した時のインタビューに次のようなやりとりが

遺つております。

「今次大戦で連合国は勝利を収めました。枢軸国は完敗して、当時英国が引き続きインドを統治する事に各国とも反対がないときに、なぜ早急にインドから撤退したのですか」

アトリー元首相は当時を偲ぶ表情で率直に以下の通り答えています。

「英印軍インド兵の、英国人指揮官に対する忠誠心が、チャンドラ・ボースのやった仕事のため低下したという事です」

「ガンジーの非暴力運動の方は、どれほど、英国の撤退に影響を与えなかったか」の問いに対しては、「ごく僅かです」との回答でした。

インパール作戦敗退後70数年を経過しましたが、日本軍・ボースの国民軍将兵の捧げた犠牲が、その後インドだけでなく世界人類に残した大きな貢献を改めて考えたいと思います。

『偕行』でインパール作戦記を学んだこの機会に、「歴史」とは何かを、広い局面から分析し、その意義の深さも考えねばならぬ事を学びたいと思います。

【参考資料】

- ・「インパールを越えて」国塚一乘
- ・「インパール」高木俊朗
- ・「自由と独立への道」終戦五十年国民委員会
- ・「F機関」藤原岩市
- ・「昭和の戦争記念館」名越三荒之助